

天声人語

梅雨の晴れ間に東京の日本橋を歩いて渡った。関ヶ原の合戦の後に架けられ、いま20代目。欄干を飾る麒麟や獅子像に風格が漂う。だが見上げれば、首都

高速道の下腹が橋を覆い、せつかくの陽光が届かない▼橋のすぐそばに本店を構える百貨店「三越」（現三越伊勢丹）の元社長、中村胤夫さん（81）は入社時がちょうど首都高の建設中だった。

「高速道は戦後復興の象徴でした。心を躍らせて工事を見守ったものです」。建設反対の声を聞くことはなかったという

▼だが開通から5年もしないうちに落胆が頭をもたげる。「空が見えない」「橋が台無しになる」。商家の主人たちからも嘆き節が出る。「名橋『日本橋』保存会」が結成され、首都高の移設か撤去を

求める活動を始めた。ちょうど半世紀前のことだ▼橋の水洗いなど地道な作業を続け、賛同署名を国会に出した。国交省や東京都の態度に変化が現れたのは昨夏のことだ。先月の会議では、日本橋の上

を含む1・2⁺部分を地下にという具体案も出てきた▼とはいえ、見込まれる工費は数千億円。「なぜ日本橋だけ特別扱いを」「介護施設や保育園の拡充を急ぐべきでは」。そんな声を筆者もよく聞く

▼むしろ反対論にも十分な理がある。それでも巨大な鉄の蓋に覆われたいまの姿は、哀れを誘う。思えば昭和の一時期、この国は街の景観や歴史にあまりに無頓

着だった。日本橋を起点にして、全国の街に「風景」を取り戻す。そんな百年の計を立ててもよいのではないか。

2018・6・9